

ホイットマンの宗教／自然／倫理

——ハロルド・ブルームとジェーン・ベネットを参照して

富山英俊

1 ホイットマンの宗教／自然

本論では、ホイットマンの宗教性と、それが自然や倫理に関わる様相を、主に『草の葉』(*Leaves of Grass*)の一八五五年初版の最初の無題の長篇詩(後に八一年版で「ぼく自身の歌」*Songs of Myself*の題を得た)と、その前の「序文」(無題の特異な散文)について、批評家ハロルド・ブルーム(*Harold Bloom*)による『選詩集』(*Selected Poems, Library of America*)編集や論評を参照しつつ論じる。また哲学者ジェーン・ベネット(*Jane Bennett*)の近著『流入と流出——ホイットマンとともに書き換える』(*Influx & Efflux: Writing Up with Walt Whitman*)の第三章も関連するので扱う。

筆者のその主題に関する論考はじつのところ、拙著『比喩と反語——アメリカの詩と批評』の29―31章に含まれていて(29章は拙訳『草の葉 初版』の「訳者解説」の再録)、ブルームの『選詩集』については言及もしている。だが、その批評家の文学論・宗教論に詳しくは触れていないし、ベネットの近著はもちろん扱っていない。私見では、その二人の互いに異なった視点からのホイットマンへの反応は、詩人の特異な宗教性の特徴をそれぞれのやり方で照らし出してい

る。本論は、それらを確認し、特徴づけ、さらにそれらが生じる所以について見解を述べたい。

さて拙著の該当章でも行っていることだが、やはり必要なもので、その一三三六行の第一詩の展開を、まずは最低限でも確認するなら——詩人は冒頭で「ほく」と「きみ」と宇宙の万物を無差別に「今」ここで肯定する世界観を説明して(霊肉の階層秩序の否定もその特徴だ)、それ以降は、五感から始まる世界の諸相を、挿話を語り事物を列挙しつつ祝福する。だがそれは自己性愛や同性愛(それと名指されるわけではないが)の危うさに触れ、次第に世界の悪と悲惨の列挙、それらとの同一化に導かれる。その行為がある限界に達し、キリスト磔刑の像が出現して乗り越えられる(らしい)箇所は(初版形九五五—六三行、六七年版以降でセクション38内)、まず「なにかほくはほうつとさせられた。あとへ下がれ! / ほくにすこし時間をくれ、なぐられた頭や眠りや夢やあいた口の向こうに、 / ほくは気づくといつも間違いの際にさる」(“Somehow I have been stunned. Stand back! / Give me a little time beyond my cuffed head and slumbers and dreams and gaping, / I discover myself on a verge of the usual mistake”)と、自らが衝撃を受け茫然と「さる」の間違ふの際にいと認める(マルコム・カウリー Malcolm Cowley 編ペンギン版『草の葉初版』*Leaves of Grass: The First Edition*, 68-9。以下その版本のページ数を示す。邦訳は拙訳『草の葉 初版』から)。

そのあと、「ほくが嘲るものや侮辱を忘れられる! / ほくがこぼれる涙や棍棒や槌の打撃を忘れられる! / ほくが離れた眼ざしでじぶんの十字架と血まみれの戴冠を見ることができる」(“That I could forget the mockers and insults! / That I could forget the trickling tears and the blows of the bludgeons and hammers! / That I could look with a separate look on my own crucifixion and bloody crowning!”)と、磔刑のイメージが、「ほくが嘲るものや侮辱」や「こぼれる涙や棍棒や槌の打撃」を「忘れられる!」ことについて、それらを「離れた眼ざしで」「見ることができる!」ことについて語られる。その(謎めいた)帰結は、「ほくは思いたす……ほくは延期された部分を再開する。 / 岩の墓場はそこに委ねられるものを増殖する……どんな墓場でもそうする……、 / 死骸たちが立ちあがる……切り傷が癒される……束縛がほくをけおさる」(“I remember … I resume the overstraid fraction, / The grave of rock multiplies what has been confided to it … or to any graves, / The corpses rise … the gashes heal … the fastenings roll away”)と「As

くは思いたす」(こと)によって「延期された部分」が「再開」され、「委ねられるもの」が「増殖」され、「死骸たちが立ちあがる」復活の場面となる。なお(ブルームは触れないが)、原文の“multiplies”「増殖する」は性的な要素の介入を、“to any graves”「どんな墓場でも」はキリストの唯一性の否定を示唆する。

さて(こと)での磔刑に関する三つの「That節はどんな「間違い」に言及するかを、この一節の源泉である草稿は明らかにするが、それは、ブルームが前記の『選詩集』で諸詩篇の前に載せる草稿群に含まれる——「むなしく釘は ぼくの掌を貫いた。／ぼくは ぼくの磔刑と血まみれの戴冠を思いたす／ぼくは 嘲るものたちと打ちつける侮辱を思いたす／墳墓と白い亜麻布は ぼくを復活させた／ぼくは ニューヨークとサンフランシスコで生きている／ふたたびぼくは二千年のあと街を歩く。」(“In vain were nails driven through my hands./ I remember my crucifixion and bloody coronation/ I remember the mockers and the buffeting insults/ The sepulchre and the white linen have yielded me up/ I am alive in New York and San Francisco./ Again I tread the streets after two thousand years”) (7) (邦訳は、沢崎順之助・富山英俊・江田孝臣編訳『アメリカ詩アンソロジー』三七の拙訳から)。この草稿で詩人は「ぼくの磔刑と血まみれの戴冠」を語り、「嘲るものたちと打ちつける侮辱」からの「復活」を「思いたす」と記し、世界のあらゆる存在者となり共感・共苦する運動の一環として、自分がかつてキリストであった記憶もあると明かす。それゆえ詩集第一詩での「間違い」とは、まさにそれを「忘れられる」ことだった、という繋がりは明白に了解できる²⁾。

ブルームは、詩のその一節を重視し、『選詩集』の「序論」(“Introduction”)で論じるが、その解説にも解説が必要だ。そこでまずブルームとはどんな批評家かを確認するならば、巨大な読書量と英米詩の暗記量を誇り、膨大な数の著書と編著を残し、後期は西洋の正典の擁護者を自任した。だが知的流行などは超越した正統派だったとは言えず、作家主体の自覚を二次的と見る間テクスト性(intertextuality)論に影響され、またロマン・ヤコブソンによる、隠喩／換喩(範例／統辞)の二軸を言語活動にとつて根本的と見る説を独自に拡張した。ブルームが唱えた「影響の不安」説は、先行詩人・作品に対し後統詩人・作品が独創性を確保する闘いの展開図式を、個別の詩の主題や比喩の進行のパターンのうちに読みとれる、と論じた(主な読解対象だったロマン派的な詩人たちの危機を演じる詩篇の含む、内なる分裂と苦悩から始

まり、多くはその解決と高揚に向かう展開のうちにそれらを感じしらしい)。精神分析やカバラ思想をめぐる思弁が関係する(とされる)その図式は日本語文献では、原著一九七三年の『影響の不安』(*The Anxiety of Influence*)の邦訳の解説内や(三〇七—一八)、一九七五年の『カバラと批評』(*Kabbalah and Criticism*)の邦訳の解説内(一八二—一五)紹介されている。これらの諸段階は、不思議な名称、クリナメン→テスセラ、ケノーシス→デモナイゼーション、アスケシス→アップラーデスと呼ばれ、それぞれには、反語→提喻、換喻→誇張法、隠喻→再置換法といった諸比喩の交替が対応するとされた(比喩については一九七六年の『詩と反復』*Poetry and Repression*で定式化された)。

私見では、まずこの説は、文学作品一般に関する影響論というより、自らの精神という空間で、暗誦する諸詩篇が交響しあう特異な批評家の体験の反映であり、他の読者が再認できる種類のものでないだろう。他方、それ自体でも問題含みのヤコブソンの隠喻／換喻の二軸説を無根拠に拡張するらしい部分については、批評家の記述にもかかわらず、それらの諸比喩の「同定」を、複数の人間が相互に有意義に確認しあうことなど不可能と思われる³。——ただしブルームは後期には、“trope”や“figure”とつづいた(日本語の「比喩」に緩く該当する)語は当然用い続けるが、分類による比喩分析をほほしなくなつた。たとえば『選詩集』の「序論」の一節は、ホイットマンの詩「朝早くアダムのよう」に(“As Adam Early in the Morning”)からの「はくが通るところを見よ」(“Behold me where I pass”)を引用しつづこう記す——“pass”「通る」とは卓越したホイットマン的な比喩(tropes)の一つであり、部分的には彼が復活したアダム・キリスト像と一体化していたことを示す。それはイエスでなくウォルトなのだ(“pass” is one of the superb Whimmanian tropes, and partly indicates his identification with a resurrected Adam-Christ figure, not Jesus but Walt”) (xvii)。この“trope”は“image”や“figure”とつづいた語と置き換えうる。表象や観念を緩く指す用法であり、諸比喩の分類に基づく同定をしていない⁴。

だがさて、いまの引用は詩人とキリストとの同一化に触れていたが、その続きは以下のものだ——「ひとはホイットマンの復活を、その旅の途上にあつた一八五四年に位置づけられるだろう[……]彼は、私がアメリカ宗教と呼べるだろうと考えるものに属する詩人だ。それはポストキリスト教的であり(そう認めるものはあまりないが)、ペンテコ

ステ派、モルモン教徒、エマソン主義者(など)はヨーロッパのプロテスタンティズムとほとんど連続性をもっていない」
〔“One might date Walt’s resurrection as 1854, when he was in the middle of the journey [...] He can be regarded as the poet proper of what I think may yet be called the American religion, which is post-Christian (though few will admit this). Pentecostals, Mormons, and Emersonians (among others) have little or no continuity with European Protestantisms”〕(xvi-vii)。こうしてブルームは、詩人の「復活」体験を語り、彼をヨーロッパと分離した「ポストキリスト教」的な「アメリカ宗教」の詩人として特徴づけその系譜を辿る。——ただし同所は「ホイットマンは、エマソンから靈感を得つつも折衷的で、超越主義的な理想主義者というよりエピクリオスの唯物論者だった」〔“Whitman, though inspired by Emerson, was eclectic and more of an Epicurean materialist than a Transcendental idealist”〕とホイットマンを「エピクリオスの」とも評している。

これらはブルームの宗教論を前提とする。彼は「宗教評論家」(religious critic)をも名のり、一九九二年の『アメリカ宗教』(*The American Religion*) 他の本を書いた。論点として、ウォルトの宗教的「復活」を言うのは先の初期草稿への言及だが、詩人の属す「アメリカ宗教」の「ポストキリスト教」性とは——「詩人はキリスト者でなかった」という、マルコム・カウリーのペンギン版『初版』「解説」が言うような(xiv) 通常の意味でなく——、一九世紀初頭の熱狂的な信仰復興(のちの福音派につながる)以降を、個人の体験を重視する独自のアメリカ的信仰内容・形態と見る特異な語法である。ただし他方でブルームは、ホイットマンはエピクリオス(また他所ではルクレティウス)的唯物論に属すと言うのであり、それと「アメリカ宗教の詩人」との関係は分明でない。

さてペンギン社はブルーム編の一八五五年『初版』本を二〇〇五年に刊行したが(現在も入手可のカウリー編の本とは別に)、その「序論」の一節は「アメリカ宗教」をより詳しく説明する——「アメリカ宗教は、見かけにかかわらず、神秘主義的でない。私は論じたいが、ケンタッキーとテネシーの境界のケーン・リッジでの信仰復興で一八〇〇年に始まったわれわれの内発的な信仰のほとんど抑制されない三つの主要な要素は、内なる神、神だけと共有する孤独の自由、そして己の最良で最古の残余はけっして自然や被造物の一部でない」という確信である」〔“The American Religion,

despite its maskings, is not mystical. Primary to our natural faith, which I argue began in 1800 with the Cane Ridge Revivals on the Kentucky-Tennessee border, are three barely repressed convictions: the God within, the freedom of solitude shared only with that God, and the conviction that one's best and most ancient residue never was part of nature or creation" (xviii)。このようにブルームは、「ポストキリスト教的」な「アメリカ宗教」の骨子を、個人の内なる神、その内面で神を「知る」体験（「靈知」の意のギリシャ語起源の「グノーシス」gnosisという語も用いる）、人はただの被造物でなく神的な痕跡を留めるといふ信念、とするが、これは一個人の宗教的発想からの強引な一般化という印象は与える。（ただし二〇一五年の『ダイモンは知る』*The Daemon Knows*で言及されるが(33)、彼は講演旅行のたびに各地の教会を訪れ話を聞いたと言い、『アメリカ宗教』は宗教思想史書を大量に参照してはいる）。またヨーロッパ的キリスト教との明確な切断説には、疑問が多いだろう。だがそれでも、合衆国ではキリスト教の一面がとくに顕著になり、大局的には、ホイットマンはその風土から出現した、という道筋は理解できるものだ。——ただし詩人がキリスト教から通常の意味で離脱する局面については、後述のようにブルームの記述は明快でない。

「ぼく自身の歌」のセクシオン38以降の展開を、ブルームはときに「イエスの復活のあと昇天までの四十日」に擬える。一九九四年の『西洋の正典』(*The Western Canon*)は、先に見た草稿に言及しつつこう述べていた——「『ぼく自身の歌』の最初の草稿断片は、構成された作品のセクシオン38よりさらに密接に、アメリカ的イエスとの同一化を記録している[……]アメリカ宗教のイエスは、十字架に掛けられた男でなく昇天の神でもなく、むしろ弟子たちと四十日をすくした復活した男である」(“The notebook fragments that are the earliest draft of *Song of Myself* record an even closer identification with the American Jesus than does their revised form in section 38 of the composed poem [...] The Jesus of the American Religion is neither the crucified man nor the God of the Ascension, but rather the resurrected man who passes forty days with the disciples”) (249-50)。だが彼はさらに、「『ぼく自身の歌』の最後の十五のセクシオンは、復活した男についてのわれわれの最大の表現だ」(“The poet of the last fifteen sections of *Song of Myself* is our largest representation of the resurrected man”)と述べ、その長篇詩の終盤は「復活したイエスの世

界」だと特徴づける。しかし、これは大方の読者の読みとりと合致するだろうか？ 一端を示せば、たとえばセクション41の「比較宗教」的な一節では、詩人の宗教的・詩的直観が超えるべき対象として列挙される世界の神々のうちに、「ほくの紙挟みにマニトローを綴じずに入れ、一葉にはアララを載せる、銅板の十字架もだ」(“In my portfolio placing Manito loose, and Allah on a leaf, and the crucifix engraved”) (71)と、キリスト像も含まれる(初版形一〇二六行)。また詩の終幕のセクション52はよく知られるように、「ほくはじぶんを土に遣し、ほくの愛する草から育つ」(“I bequeath myself to the dirt to grow from the grass I love”) (86)などと、大気へと流出する「ほく」が土にもどり草としてまた生える、という自然的なイメージを示す(初版形一三二九行)。

——とはいえ、詩人とキリストとの同一化が作品展開で重要であること(それを全面的に支配しないにせよ)は確かと思われる。ブルームがそれを「アメリカ宗教」に位置づける際の特徴は次節で、ベネットのホイットマン解釈と関連させつつさらに検討する。またブルームは同所で、「私の考えでは、批評家たちは一般にそれ「キリストとの同一化」を、困惑させるものなので論じようとしなご。ホイットマンの率直な自己性愛が論じにくいと同様に」(“I think that critics generally do not discuss it because it embarrasses them, just as Whitman's frank autoeroticism is difficult to discuss”)と指摘するが、これは私見では正鵠を射て、彼の論評や選詩集編纂を貴重なものとする。

他方ブルームは、二〇一一年の『影響の解剖』(*Anatomy of Influence*)では、ハート・クレイン(Hart Crane)の「海の旅」(“Voyages”)との対比で「ほく自身の歌」を論じる際にこう記す——「クレインによる」海の喚起のことは遣いはシエークスピアの確かさをもつが、ホイットマンの「ほく自身の歌」のセクション52と同様に解体を招き入れてもいる。ただしホイットマンの出立がエピクロスのールクレティウスの対し、クレインのそれはオルフェウスの一プランドン的である」(拙訳) (“Crane's invocation of the sea has a Shakespearian sureness to its phrasing, even as it, like Whitman's “Song of Myself,” section 52, courts disintegration, though Whitman's departure is Epicurean-Lucretian, and Crane's is Orphic-Platonic”) (228)。つまりブルームは「ほく自身の歌」の終幕はエピクロス／ルクレティウスの自然への解体／帰還だと認めるようだが、それは、セクション38以降を「イエスの復活後の世界」

とする見方と齟齬しないだろうか？⁷

2 ホイットマンの宗教／自然／倫理

一八五五年初版の巻頭の無題の長大な散文(「序文」と、無題の長篇詩(後に「ぼく自身の歌」*Song of Myself*と名づけた)から始まる詩的経歴が示すホイットマンの「宗教思想」は、異質な諸要素を含み、簡潔な要約を許さない。だが(「比喩と反語」29章ですでに論じたように)とくに初期作品には顕著に、生命の力(生殖の力)は自然世界の隅々に満ち溢れ、人間に限らずあらゆる存在者により分有される、という直観が読みとれる。それはまた、宗教的な救いと正しさをもたらすと予感され、キリストの贖罪の力をも包含するようだった。つまり、詩人が育ったキリスト教の環境では通常は「超越的」と解される宗教の力が、いわば自然化され内在化されていた。「ぼく自身の歌」の中盤は、その直観の力を世界の悪に抗して維持できるか、という試練の実演だったが、たとえばその後の展開の一節(セクション43内)では、直観される「それ」は、「それは若く死に葬られる青年を裏切らない」(“It cannot fail the young man who died and was buried”) (76)以降、種々の悲惨を被る人間たちと宇宙の隅々の存在者たちのすべてを、「知られるかぎり最小の藁屑」(“the least wisp that is known”)に至るまで「裏切らない」(“not fail”)と語られる(初版形一一二二—一一三三行)。

そうした自然の内在性における救済・義化という発想の一端は、ホイットマンが「序文」で来るべき「詩人」を語る次の一節にも現れる——「かれは議論するひとでない……かれは裁きだ。かれは判事が裁くのでなく日光が無力なものに降りそそぐように裁く。かれはもつとも遠くまで見るにつれ最高の信念を得る。かれの思想は事物の賞賛の讃歌だ。平等な基準を離れた魂や永遠や神についてのお喋りにはかれは沈黙する。かれは永遠を序章と結末のある芝居として見ない……かれは永遠を男たち女たちのうちに見る」(一一三) (“He is no arguer … he is judgment. He judges not as the judge judges but as the sun falling around a helpless thing. As he sees the farthest he has the most faith. His thoughts are the hymns of the praise of things. In the talk on the soul and eternity and God off of his equal

plane he is silent. He sees eternity less like a play with a prologue and denouement ... he sees eternity in men and women” (9)。——ここでは「詩人」は「議論するひと」でなく自らが「裁き」であり、「判事が裁くのでなく日光が無
力なものに降りそそぐように裁く」と言われるが、この光のイメージは、宗教的な正しさや救いが自然化された帰結で
あると了解できる。また「詩人」は「平等な基準を離れた魂や永遠や神についてのお喋りには沈黙」し「永遠を序章と
結末のある芝居として見ない」とされるが、これは、キリスト教が(整合した)ことばによる教説の水準で示す、初め
と中間と終りをもつ救済史の構図を否定する言明だ(ちなみにこの一節は後に詩「青いオンタリオの岸辺で」“By Blue
Ontario’s Shore”の10節に組みこまれた)。

さて、現代的「唯物論」(materialism)を探求する哲学者ベネットの『流入と流出』(*Influx and Efflux*)は、主に身体
における諸力の流入と流出に着目してホイットマンを読み直す試みだが、その第3章「日光の裁き」(“solar judgment”)は、
いまの「序文」の一節などへの応答である。それは私見では、詩人にとって「光のように遍在」するもの(「重力のよう
に遍在」も同様)——先取りするなら自然の内在性の地平で生起する「反律法的」(antinomian)なもの——への、倫理
性の確保をめざしての応答と言える。ベネットは本の第2章の終わりで「重力」に関して、「重力のような共感という観
念」(“the notion of gravitational sympathy”)の示す「無道德的領域」(“amoral territory”)を感知し、「一種の汎神論」(“a
kind of pantheism”)のめぐり「深く自然的だが」(“...”)撰理・先見によらなく、「(“profoundly natural [...] and yet not
providential”)とこの特性を指摘する(43—4)。彼女は第3章の始めで、「日光のように裁くとはいかなることか」(“To
judge as falling sunlight? What could it mean to do that?”)「序章も結末もない奇妙な時間的展開とは何か」(“what
is this strange temporal space that has no prologue or denouement?”)と自問し、その倫理的解釈の方向性を
「無頓着の業」(“the art of nonchalance”)、「道徳の適用」によらず機能する民主的な気質”(“a democratic ethos that
operates without “the applications of morals””)と示唆する(45)。

ベネットは要するにそれを、一面的な裁断に陥りやすい道徳的判断の中断として解釈し評価する。第3章末のまとめ
は、ホイットマンが示す「区別をしない」応答(“responsiveness that “makes no distinction””)の「日光性」(“solarity”)

について、次のように記す——「そうした日光性は、太陽の光はウィルスも拷問具も奴隷主も権威主義的指導者も平等に照らすので危険なゲームである」(“such solarity is surely a dangerous game, in so far as the sun falls equally upon deadly viruses, torture equipment, slaveholders, authoritarian leaders”)。だがベネットの推測するところ、ホイトマンはこう考えた——「おそらく宇宙的連結の感覚はもう、真理への固着と裁く快楽は強力なので」(“perhaps because a sense of cosmic connectedness is so fragile and the veridical reflex and its judgmental pleasures are so strong”)。『規範的範疇や識別感覚の長期の中断は、社会秩序・正義・正気と両立しない』にせよ(“Prolonged suspension of normative categories and discriminating perception is incompatible with social order, justice, and sanity”)。『中間のうちにのらふらする実践は、民主主義において価値ある要素であり続ける』(“The practice of loafing in the interval remains a valuable element within democracy”) (55)。

さてベネットの哲学は、エコロジ的な諸価値や、トランプ的なものに脅かされた民主主義を擁護するために、種々の思想や科学の知見を取り入れつつ、二元論的な主観／客観の対象操作図式や人間中心主義から離れる新たな語彙や語りを提案するものだ。つまり、『無正確』(“anexact”)、『分人』(“dividual”)であり分割不可の“individual”『個人』でない)、『無道徳』(“amoral”)などの語を用い、また動詞の中間態に着目する¹⁰。そしてホイトマンやソローを意識的に読み換え、必要に応じ『書き換える』(“write up”)こともすると記している(XX-xxii)。だからホイトマンの『遍在する重力や光』の『倫理的』な『読み替え』は、そうした意図的な試みの一環であると了解はできる。だが、詩人が一八五四―一八五五年に正義・審きの一面性を中断し補足する文脈でそれを語っていた、と理解できるだろうか？　むしろそれらは、宗教的な『反律法主義』的現象(antinomianism)の現れだったのでないだろうか？

『反律法主義』とは宗教に付随する広範な現象だが(キリスト教の内部でも外部でも、西洋でも東洋でも起りうる)、ここでは、ブルームの『アメリカ宗教』が、一九世紀末の南部バプテスト穏健派(原理主義者と対比して)を巡りそれを語る箇所を引こう——『個人の更新可能な出会いにおいてイエスを知るバプテストの経験は、公的礼拝に優先し』(“The Baptist experience of knowing Jesus, in a solitary and renewable encounter, takes priority over public worship”)

内なるイエスとの一体化を求める体験重視の「神秘的熱狂」(“Mystical Enthusiasm”)は、「そのエクスタシーを「復活」として知る」(“Knowing this ecstasy as Resurrection”)へと至る。つまり「その意味で「復活」は、人とイエスとの一体化において、ひねにすて起る」(“In that sense, the Resurrection always already had taken place, in your oneness with Jesus”) (205)。——「ひねにすて」は現代の思想の領域では、「一項が優位とされる二項対立の構図が転倒される」観念の運動を表すために脱構築派他が愛用する定式的表現となっているが、「(劣位のはずの)Aはつねにすてに(優位のはずの)Bである」やその逆)、宗教的経験や思想においては、信仰対象の人知を超えた力が上下や先後や内外といった通常の人間の諸範疇を揺るがす際に——「反律法」の観念の力が作用する際に——現れうる。

それゆえブルームはこう続ける。——「バプテストの魂とイエスは、相互の知悉により、古のグノーシスを更新するが、それは種々の問題をもたらす。そうしたグノーシスにおいて、贖われた魂の義が永続的な状況とならないことがあるだろうか。[……]もし人が、経験において、一たび永久に救われるなら、その人を、善悪の彼方で反律法的になることから遠ざけるものがあるだろうか」(“The Baptist soul and Jesus, in their mutual act of acquaintance, renew an ancient Gnosis, with all the problems such a renewal brings about. In such a Gnosis, how can the justification of the redeemed soul not become a perpetual condition? [...] If you are saved once and for all, experientially, what will keep you from becoming an antinomian, beyond good and evil?”) (207)。つまりバプテストの魂がイエスと一体化しそれを「知る」(グノーシス)なら、その「義化」の「永続」において「反律法」の「善悪の彼方」が生じると、ブルームは語っている。それゆえ、「創造者と被造物は区別できなくなり、肉体と魂の二元論は廃され、バプテストの神秘家は、復活しているとは何かをすべに知る」(“Creator and creature are indistinguishable, and the dualism of body and soul is abrogated, so that the Baptist mystic already knows what it is to have been resurrected”) (209)。その経験は(ホイットマン論でも同様に擬えられるが)、「復活と昇天のあいだの四十日の弟子たちの経験」(“the forty days experienced by the Disciples between Resurrection and Ascension”)であるとされる(210)。

このように、今こゝで信仰対象と一体化する体験は、救われざる現在から救済の未来に向かう時間的展開や、魂／肉

体、善／悪といった分別・秩序の相対化・無化をもたらしているが、これはベネットが詩人に認めた「無道德的」(“amoral”)で「摂理・先見によらない」(“not providential”)という特性と符合しないだろうか——「摂理」(providence)はまさに救済史の時間的展開に関わる語だ。また、ブルームはキリスト教のなかの反律法的現象について語り、それは大局的にはホイットマンが育った宗教的風土の一要素であったことを示唆するが、ベネットが論評する重力や光といった「自然的」な要素の出現は、ホイットマンが一面でキリスト教を離脱して、宗教的なものの自然化・内在化のうちにいたことの結果と見なせる。

ただしブルームは「アメリカ宗教」とホイットマンについて、キリストとの内なる熱狂的一体化の体験(「キリスト復活後の四十日間」)を強調するが、南部バプテストについてはよく理解しむごに語る反律法の他の諸要素、つまり霊肉二元論の無化や善悪の彼岸を、ホイットマンに関しては(顕著であるのに¹¹)なぜか論じない。私見ではその理由は、根本的にはブルームが、「宗教的経験は高いところか深いところで起こる」という世界像に属するからだろう——つまり彼が「アメリカ宗教」の特徴と規定した、「被造物の遙か上にある創造神から人の魂の内奥へと及ぶ作用」や「その内奥に残る創造の痕跡」といった像だ¹²。それゆえ彼の念頭に、自然の内在性における救済・義化・反律法はない。よって他の文脈では反律法の諸相を論じるのに、ホイットマンでそれらが自然において生起する局面には触れず、エピックロス／ルクレティウスの唯物論などを、宗教的体験との関係があまり明確でない形で、語ることになる。

なおその自然化・内在化ゆえにホイットマンの「東洋思想」的な——「悟りや救いはつねにすでに自ずからある」という「本覚思想」的な——受容が生じている、という経緯は、拙著『比喩と反語』の31章(「ホイットマン的的反律法と仏教的反律法(本覚)」)で扱った。

*本論考は、日本英文学会関東支部二〇二四年度夏季大会・アメリカ文学部門シンポジウム「ホイットマンと／の現在」での講師としての発表、「ホイットマンを「いま読む」——Harold Bloomを参照しつつ」に基づく。ともにシンポジウム講師であった梶原照子氏、

川崎浩太郎氏をはじめ、会場の諸氏に謝意を表したい。

注

1 とはいえ、その草稿を参照する読解はごく少数であり、さまざまな批評家たちがこれにどう応答し解釈してきたかは、拙著「比喩と反語」の30章（磔を忘れること／思い出すこと）で詳細に跡づけた。——付言すれば、この草稿を含むノートは従来一八四七年頃のものと思なされ、それに基づき諸説が論じられてきたが、ノートを精査するとじつは五五年の初版直前の記入だったと分かる、という訂正が近年示されてくる（Matt Millerの研究書 *Collage of Myself*、Levin & Whitley 編の *Walt Whitman in Context* 中の Miller による項目 “Notebooks and Manuscripts” に説明がある）。ちなみにその草稿箇所（抹消線を含む）転記は、Miller と Zachary Turpin 編の *Every Hour, Every Atom: A Collection of Walt Whitman's Early Notebooks & Fragments*, 53-4 を読め。

2 この三つの That 節は、日本では有島武郎訳（三九〇—）以来、岩波文庫の酒本雅之訳（二〇五）に至るまで「それらを忘れられたら！」という願いとして読まれ、「忘れることが間違いだった！」と読む英語圏での大方の理解と異なるが、その詳細もまた——意味を捉え難い語句 “overstaid fraction”（拙訳は「延期された部分」）の解釈とともに——、「比喩と反語」30章で論じた。

3 ヤコブソン説が言語の範例軸で起こる諸現象を「隠喩（的）」、統辞軸のそれらを「換喩（的）」として纏めることの曖昧さは、一部の論者が批判することだが、『比喩と反語』1章（文学理論の事の次第（その一端））で扱い（二一—三）、ブルームによるその拡張の問題性については18章（「ステイヴンズの比喩、批評家たちの比喩、比喩のない世界」）で言及した（二二—三九—四〇）。

4 これらの語が関係する種々の用法・実践・モデルについては、『比喩と反語』の1章と2章（「メタファーの言語ゲーム、言説実践、モデル」）で、ウイトゲンシュタインの「言語ゲーム」やフォーコーの「言説実践」概念を参照しつつ素描した。

5 ブルームは『アメリカ宗教』で自らを、「無信仰のユダヤ人だが強いクノースティック的傾向をもつ」（“an unbelieving Jew of strong Gnostic tendencies”）と規定している（30）。政治的にはリベラル派だったようで、宗教保守・右派と共和党の連携による覇権を憂慮してゐた（269-71）。

6 「自己性愛」は、ブルームが繰り返し——「同性愛」を軽視しつつ——論じる主題の一つだ。彼が示唆するようにその二つが排他的かは、疑問であるが。

7 その本がホイットマン他のエビクロス主義を論じる「エビクロスの影響の不安」(“Anxieties of Epicurean Influence”)の章は、その思想では「理念的形式や原型は存在しないので、ものが「何であるか」は知りえず、事物／現象自体があるだけで、草のように」(拙訳) (“The what is unknowable because there are no ideal forms or archetypes, but only the thing/phenomenon itself, like the grass”) (154)と、その自然性を説明する。だが、それと「アメリカ宗教」との関係は不明確に留まる。——他方彼は同所で、「ホイットマンが「死」で何を意味するか、どの二人の批評家も一致しないが、じつは多くのウォルトたちも一致していない」(拙訳) (“No two critics agree on what Whitman means by “death,” but then neither any of the numerous Wals agree with one other”)と、率直かつ正確に認める。私見では、ホイットマンにおける「死」や「不死性」の捉え難さ(彼自身にとってささ)や一貫性の欠如はおそらく、詩人のうちに霊肉二元論からの離脱とその継続(後期はそちらが主導的に見える)が共存したことに由来する。——なおブルームは二〇一五年の『ダイモンは知る』(The Daemon Knows)のホイットマンをメルヴィルと並べて読む章では、「ほく自身の歌」終盤に関して、自然主義的要素には触れていない(68-9)。

8 なお岩波文庫『草の葉 上』に所収の五五年版序文は後年の改訂縮小版からの訳。初版からの邦訳は拙訳『草の葉初版』所収と、『アメリカ古典文庫5ウォルト・ホイットマン』中の夜久正雄訳。

9 ちなみに『草の葉初版』以前の草稿の一節には(ブルームも前記『選詩集』に載せているが、「光は司教や教皇を ほかの者たち以上に照らすな。」「The light picks up a bishop or pope no more than the rest.」(7)という一行がある(拙訳は沢崎・富山・江田編訳『アメリカ詩アンソロジー』三六から)。

10 なおベネットはその本の二節(81-6)で、ブルームの「影響の不安」説を「共感・交感」(“sympathy”)論の一種として、先述の文学的特性は考慮せず検討し、「外からの流入を否定的にだけ捉える一面的な見方」と批判している。

11 この主題は「比喩と反語」の31章(ホイットマン的「反律法と仏教的反律法(本覚)」)ですでに扱っているが確認するなら、たとえば「ほく自身の歌」の初版形の四六七行には「ほくは善の詩人であるだけでない……悪の詩人であることを辞退しな。」「And am not the poet of goodness only...I do not decline to be the poet of wickedness also」(四七〇行には「悪はほくを駆りたてる、悪の改善はほくを駆りたてる……ほくは区別せず立。」「Evil propels me, and reform of evil propels me...I stand indifferent」(46)など)。

12 これと関連して、ブルームは、ホイットマンの「ほく」は三要素「魂」「soul」と「二つの自己」「two selves」つまり「対外的自己」

“outside persona”と「内なる自己」“real me”からなる独自の説を、多くの著書で繰り返し論じた(二〇〇三年の『選詩集「序論」』では XIX-XX)。とくに「ほく自身の歌」のセクシヨンの周知の一節、初版形七三行の「ほくはきみを信じる、ほくの魂を……きみに対して、ほくはきみとこのものは単一してはならぬ」(“I believe in you my soul … the other I am must not abase itself to you”) (28) の “ほくはきみとこのもの” (“the other I am”) を、大方の読者のように「肉体」(「魂」に対する)と読み、[「内なる」]はく自身 (“the Me myself”) の意に解する。また、しばしばそこに、カバラ思想が含むとされる心的構造説を援用して、宗教的意義を付した(二〇〇五年のペンギン社刊『初版』本「序論」では xii)。——「ホイットマンによる高度に独自な心の地図——ほくの自己」ほくの魂、本当のほくならしほく自身——と、nephesh、ru'ach、neshamah (カバラでは naran と呼ばれる) という三層の分割とには類似性さえ存在する (“There are even similarities between Whitman’s highly original psychic cartography—my self, my soul, and the real me or me myself—and the tripartite division of nephesh, ru’ach, and neshamah (called naran in Kabbalah)”).

私見ではそれらの説は、神秘的経験・霊的直観に必須と想定される「内奥の自己」を、ブルームの世界観が要請することから生じるのだろう。セクシヨンの解釈としては、ブルームの読みが広く影響を与えた様子はなく、たとえは Michael Moon 編の二〇〇一年刊の Norton Critical Edition 版作品集 *Leaves of Grass and Other Writings* の該当箇所注は「魂と肉体の関係性」を、種々の解釈が共有する前提と見なしている——「このセクシヨンでは、『魂』への『草のうえでのらくらじよう』という誘いの結果は、『魂と肉体のあいだのエロティックな場面(八七—九〇行)となるが、その交流は自己における深い平和の感覚を産みだすようだ」(“In this section, an invitation to the “soul” to “loafe… on the grass” events in an erotic scene (lines 87–90) between soul and body, an exchange that appears to produce a sense of profound peace in the self”) (29)。

なお、この件がブルームの諸書のどれに扱われたか(の一部)を参考せよ。記せば——*Poetry and Repression*, 256ff; *The American Religion*, 264ff; *The Western Canon*, 253ff; *The Daemon Knows*, 54ff.

引用文献

- Bennett, Jane. *Influx & Efflux: Writing Up with Walt Whitman*. Duke UP, 2020.
Bloom, Harold. *The American Religion*. Simon & Schuster, 1992.

- . *Anatomy of Influence*. Yale UP, 2011. 『影響の解剖』有泉学宙、高橋公雄、清水英之訳、小島遊書房、二〇一三
- . *Anxiety of Influence*. Oxford UP, 1973. 『影響の不安』小谷野敦、アルヴィ宮本なほ子訳、新曜社、二〇〇四
- . *The Daemon Knows*. Oxford UP, 2015.
- . *Kabbalah and Criticism*. Seabury Press, 1975. 『カバラと批評』島弘之訳、国書刊行会、一九八六
- . *Poetry and Repression*. Yale UP, 1976.
- . *The Western Canon*. Harcourt Brace, 1994.
- Levin, Joanna & Edward Whitley, editors. *Walt Whitman in Context*. Cambridge UP, 2018.
- Miller, Matt. *Collage of Myself*. U of Nebraska P, 2010.
- Turpin, Zachary & Matt Miller, editors. *Every Hour, Every Atom: A Collection of Walt Whitman's Early Notebooks & Fragments*. U of Iowa P, 2020.
- Whitman, Walt. *Leaves of Grass: the First (1855) Edition*. Edited by Harold Bloom. Penguin, 2005.
- . *Leaves of Grass: the First (1855) Edition*. Edited by Malcolm Cowley. Penguin, 1976.
- . *Leaves of Grass and Other Writings*. Edited by Michael Moon. Norton, 2001.
- . *Selected Poems*. Edited by Harold Bloom. Library of America, 2003.
- . 有島武郎『全集』第六卷、筑摩書房、一九八一
- 沢崎順之助・富山英俊・江田孝臣『アメリカ詩アンソロジー 原詩・和訳・評釈付』春風社、二〇二五
- 富山英俊『比喩と反語——アメリカの詩と批評』せりか書房、二〇二三
- ホイットマン、ウォルト『アメリカ古典文庫5 ウォルト・ホイットマン』亀井俊介編、研究社、一九七六
- 『草の葉 上』酒本雅之訳、岩波文庫、一九九八
- 『草の葉 初版』富山英俊訳、みすず書房、二〇一三